





ねこのトロンとねずみのモルは、おなじたんじょうびにうまれました。
トロンとモルは、だいのなかよしです。



木でできた小さなうちにすんでいます。
毎日、きんじょのおねえさんがごはんをもってきてくれます。
トロンとモルは、いっしょに食べました。



モルは、トロンの体のすみずみまでかいてあげるのが、とてもじょうずでした。
トロンは、「モルってほんとうにすごいんだね」といってよろこびました。



トロンは、こわそうなねこがくると、モルをまもってあげました。
モルは、「トロンってほんとうにすごいんだね」といってかんしんしました。



月がでていあるよるに、モルはトロンのあたまの上でつぶやきました。
「ぼくって、どうしてこんなに小さいんだろう。トロンみたいに大きくなりたいな」
そして、トロンはいいました。
「たくさん食べて、たくさんうんどうすると、大きくなれるよ」



つぎの日から、モルは木の上をはしりました。
そして、ごはんをできるだけたんさん食べました。
毎日、毎日、つづけました。



ある日、トロンがなくてかえってきました。

「さんぽしていたら、おとこのこが石をなげてきたんだよ。ぼくのことを、どろぼうねこっていうんだ」

「どろぼうねこなんて、ひどいじゃないか。ぼくは、いつだってトロンのみかただよ」
モルは食べるのをやめて、やさしくいいました。



よる、

「ぼくは、ちっとも大きくなれない」

モルは、かなしそうにつぶやきました。

「ぼくは、どろぼうなんかしていない。おさかなのいいにおいがしたから、ちかづいただけなんだ」

トロンもかなしそうにいました。



すると、大きな月が、トロンとモルのまえにあらわれました。

「わたしは、あかるいたいようになりたかったの。どうしたら、たいようになれるのかしら」
月はそういと、大きななみだをこぼしました。



トロンとモルは、びっくりしていいました。

「ぼくは月がでていと、わくわくするんだ。よるのさんぽは、とてもきもちがいいよ」

「ぼくだって、くらいよるをてらしてくれるお月さまがすきだよ」

「どうしてわたしのことがすきななの？」

月はいいました。

「すきなことにりゆうがいるのかい？」

トロンとモルがいっせいにそういういと、月はほほえんで、よぞらにかえっていきました。



トロンとモルは、ひさしぶりにおはなばたけへさんぽにいきました。
「ぼくは、小さなモルがすきだよ」
「ぼくは、大きなトロンがすきだよ」
と、おたがいいいました。
きのうもきょうも、なにひとつかわらないトロンとモルを、光はてらしていました。
それは、とてもあかるくてとてもしあわせな光でした。

おわり